

現代社会における育児困難の構造分析

学位論文内容の要旨

本論文は、既存の「育児不安」研究から、「育児不安」概念の曖昧さと対象把握の限界という二つの問題提起をし、「育児」期の「母親」に焦点を合わせて「育児不安」の性格を相対化して検討するとともに、育児困難の構造的把握を試みたものである。論文で用いた育児不安とは、母親であれば誰もが抱く一般的な育児の悩みや不安を指しており、その中でも特に母親の心理・意識的側面に注目して形に表そうとしたものを「育児不安」として示した。これに対し、育児不安や「育児不安」といった意識レベルでの現象形態の有無に関わらず、生活・行動レベルで生じる育児の困難さを育児困難として示した。

「育児不安」の検討については、質問紙を用いた牧野カツコによる「育児不安」尺度を精密化していく中で、母親の「育児不安」を軽減すると同時に、母親の充実感を高めていくことの重要性が見いだされた。さらに、それらに関連する要因としては、「母親の社会的な活動」や「社会的なネットワーク」、「夫の協力と精神的サポート」、「他の子どもとの比較」があげられた。また、先の質問紙調査と面接調査を通して分析した結果、自ら社会参加し、ネットワークを広げ、そこでの問題解決をはかっている主体的な母親でさえ、中程度の「育児不安」は存在しており、質問紙調査の結果から導き出される、低い「育児不安」とはならなかった。これらの結果は、尺度化による「育児不安」研究の限界を示しており、「育児不安」の性格規定について、二つのアプローチからの相対化を試みた。すなわち、母親自身への縦断調査を実施し、自らの育児を振り返る中で「育児不安」の性格規定をするという時間軸での相対化と、育児困難について、社会全体での育児構造を分析していくという、社会的な条件の違いによる相対化である。

縦断調査による母親からみた「育児不安」の特徴では、その多くが乳幼児という限られた時期に生じるものであり、また、少し時間をおいてみれば「大したことはないもの」と思える程度のもので性格づけられた。しかもそれは、時間とともに自ずと解消されていくものであり、その解決にも専門家が関わることなく、母親個人の自助努力や、あるいは自助グループ的な育児サークルの中で解消されていた。しかし、表面的には、悩みを共有することで解消されている一方で、個々の母親は、競争原理に裏付けられた不安と情報に煽られて、育児や教育サービスを購入することで解決をはかり、さらに「育児不安」を増幅させている現状も確認できた。

社会的条件の違いによる相対化では、育児困難を母親の主体性に注目しつつ構造的に把握しようと、従来の固定的な資源(構造的資源)に加えて、より柔軟な編成的資源という概念を用いて分析した。そこでは生活基盤の安定性が生活問題の解決を規定していること、また、問題の性質も、そこで二分されていることが示された。育児不安という母親の意識の現象形態も、構造的・編成的資源の大きい母親には、「育児不安」や育児ノイローゼと

して顕在化していく一方で、反対の極には母親の意識が潜在化し、育児困難の実態さえも見えにくくなっている「放置されている育児困難」が存在した。つまり、育児における母親の心理的な側面をとらえた「育児不安」というものでさえ、家族のもつ資源、すなわち生活構造によって規定されているのである。

ここで、社会的な条件の違いからみた、育児不安、「育児不安」、そして育児困難の関係を整理すれば、育児不安は、社会的にどのような条件にある母親についても、育児をしていけば生じる育児の悩みにも似た性格をもっており、それは、子どもの成長とともに自然に解消されるものである。しかし、そうした育児不安も生活構造を通してみることにより、問題が顕在化する母親たちと、問題が見えにくくなっている母親たちとに、大別される。生活基盤が安定している母親たちに代表される育児問題は、マスコミ等でも取り上げられ、その母親の心理的側面は「育児不安」として注目される。反対に、生活基盤が脆弱で生活問題を抱えている母親の育児問題は、生活問題につぶされて後回しとなったり、育児・責任の放棄という現象形態をとり、顕在化しにくい。問題が顕在化しなくとも、育児の、そして子どもから見れば子育ての問題が生じていることから、育児困難とは、注目されやすい育児や母親の問題だけではなく、潜在化している育児や母親の問題をも含めたものでなければならない。

さらに、今日の「育児不安」というのは、現代の育児困難を共通基盤としながらも、母親の心理的側面に注目することによって、問題の表面的な解決が育児サービスへと傾斜していく中で創られた産物であると考えられる。すなわち、母親自身が「育児不安」として強く意識化し、育児・教育サービスを購入することで解決を図り、かえって、その不安を高めていくのである。そこからは、研究者さえもが、母親を悩ませる「育児不安」の軽減に役立つと思いつつも、その一端で「育児不安」の看板を大きくし、それが母親たちの不安を煽っている可能性があることを自戒を込めて痛感した。そして、そうした母親の意識と育児サービスとの間で、「育児不安」が増幅していく側面において、「育児不安」が社会問題化されてきているといえよう。

ところで、家族のもつ資源の大小の極に位置する共通の問題として、「母親の孤立」が考えられる。母親の存在も、これらの資源のありように規定されながら二種類の孤立化が考えられる。一つは、情報やサービスを求めて育児を外注化していけばいくほど、母子が社会から孤立していくというパラドックスのような孤立化であり、いま一つは、経済的要因や社会的偏見などにより、物理的に社会から遮断する（される）形での孤立化である。これまでは主に、前者の孤立化に対しての支援が成されてきたが、育児困難全体から支援を考えていくなれば、「放置されてきた育児困難」を抱えている母親たちも視野に入れた保障を中心に考えていくことが必要となる。すなわち、二つの孤立化に対応していくことである。こうした「育児不安」だけに限らず、育児困難全体へのアプローチの重要性は、社会的に弱い・潜在化している立場にある家族だけへの対応に終わらず、ひいては子どもを育てている親全体の生活条件を底辺から保障することに他ならないからである。

今後に残された課題としては、第一に、歴史段階での「現代の育児困難」の特徴を把握し直すことである。第二には、母親以外の「育児不安」と、育児期以降の「不安」についての検討である。また、第三の課題としては、「支援」ではなく、「保障」という視点から育児や子育てを展望するならば、先に述べた二つの孤立化へのより具体的な対応策の内容とともに、育児・子育て期にある家族にとっての生活基盤の安定とは何を示すのか（育児・子育て家族の最適・最低生活保障）ということが、新たな課題となる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 杉 村 宏

副 査 教 授 青 木 紀

副 査 教 授 牧 野 カツコ

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)

学 位 論 文 題 名

現代社会における育児困難の構造分析

少子社会の出現はあらためて子育ての難しさを浮き彫りにしたが、このような経過の中で母親を取り巻く要因に注目し、その心理的負荷の軽減を図る方策を模索する研究に、一連の「育児不安」研究がある。本論文はこうした「育児不安」に関する先行研究の批判的検討を行ない、意識レベルの負担感としての「育児不安」が少ない母親に注目し、「育児不安」尺度では捉えきれない育児困難の階層的な性格に焦点をあてた研究である。またその目的は、母親の構造資源と編成資源の分析を通して、育児をめぐる困難の諸相における「育児不安」の位置と性格を構造的に明らかにすることである。論文の構成は、2部構成に近い内容になっており、前半の第1章「育児期の母親の不安」、第2章「縦断調査から見た『育児不安』の性格」は、「育児不安」概念とその測定尺度による要因分析を、札幌市の全保健所の3歳児検診に訪れた母親に対するアンケート調査、訪問調査、4年後の縦断調査を駆使して検討しており、後半の第3章「育児困難の構造分析」、終章「育児困難の構造と類型」は、「育児不安」を含む育児困難の構造と現象形態を、幼稚園通園児、保育所入所児、児童相談所利用児の母親を対象とした訪問調査によって、母親の資源と行動の分析を通して典型的に把握し、「育児不安」のみが社会問題化するメカニズムの解明と、潜在化しがちな育児困難をも視野に入れた社会的対応のありかたの検討にあてられている。

本論文の研究において評価される点の第1は、育児期の母親のストレス蓄積による「育児ノイローゼ」や児童虐待、育児放棄等の問題行動の兆候として注目された「育児不安」は、その測定尺度による数値の相関で論ずることには限界があること、さらに「育児不安」の階層的傾向に注目して、育児困難の全体像の中における「育児不安」の位置と性格を検討し、母親を取り巻く資源の大小の両極に、「育児不安」と「放置されている育児困難」が存在し、その共通する問題点は「母親の孤立」であることをはじめて明らかにしたことである。とくに「育児不安」が、育児情報や育児サービスの商品化と他児比較によって、なかば社会的に強制される、競争社会下の「育児の標準」とも呼ぶべきものからの逸脱不安を基底にしており、こうした点から社会的に形成されたものであることを指摘した点は高く評価される。さらに「育児不安」は、一定の安定した資源をコーディネートすることに

よって、情報や育児産業サービスによる育児の「社会化」を促進するほどに、母子カプセルが社会から孤立していくというパラドキシカルな孤立化によって引き起こされ、他方で、潜在化し「放置されている育児困難」は、経済的要因や社会的不利によって物理的に社会から遮断される形での孤立化によって引き起こされていることが、実証的に解明されている。

評価される第2の点は、多様な階層の母親の育児に関して、縦断調査と生活構造調査によって得られたデータに基づき、母親の構造的資源（世帯年収、母親の学歴、母親の就労形態、父親の職業）と編成的資源（母親の生活時間、情報、ネットワークとそのコーディネート力）を分析用具にして、育児困難の類型と性格を明らかにした研究方法上の独創性である。育児困難の階層的把握を、従来の生活の物質的基盤による階層区分から一歩進めて、余暇時間の活用、ネットワーキング、構造的資源と情報のコーディネート力に着目した編成的資源を加味することによって、4類型の特徴と類型間の変動の可能性をも分析することが可能となり、育児困難の構造を動的に捉えることに成功している。

第3には、以上のこととも関連して、育児困難への対応に関する評価の視点を提示し得た点である。少子化への対応としてさまざまな「育児支援」策が構想され一部実施されているが、これらの多くは電話相談や夫のサポート、育児サークル支援など、顕在化された「育児不安」に対する編成資源の組換えを援助するものであり、「育児不安」の社会的性格からも明らかなように、こうした支援がかえって不安を増幅することにもなり得ること、また、もっとも援助を必要とする潜在化し「放置されている育児困難」を抱える母親が、こうした支援の網の目からもれる可能性があることが指摘され、さらに構造的資源を強化するための制度的対応に加えて、個別的な援助と直接的な介入（ソーシャルワーク）を視野に入れた対応の必要性を示唆する、現代的な意義を有している。

以上、本論文の研究上の積極的な評価について述べたが、今後解明すべき課題はつぎの通りである。本研究は、育児期の母親に焦点を絞り育児困難の構造を資源と行動から分析をしたが、本来育児は母親のみによって担われるものではなく、育児にかかわるもの全体の「育児不安」や育児困難の分析を行うこと、また、歴史段階における育児困難の「現代性」を検討することである。

以上の論文審査内容から、審査員一同は、岩田美香の学位請求論文「現代社会における育児困難の構造分析」を博士論文に相当すると判断した。よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。